

# 助成年度：平成 11 年度

[所属] 野生生物保護学会

[役職] 会長

[氏名] 和田 一雄 (他計 7 名)

[課題]

## 中国秦嶺山系におけるキンシコウの保全に関する研究

[内容]

生態学と保全学。調査地は玉皇廟村である。

1) 植生の特徴と食性：群れは多くの場合北斜面を利用していた。落葉広葉樹林であった。そして、冬の食物は落葉広葉樹林の樹皮と冬芽、その幹に寄生する地衣類に限られる。7 月ライトランセクト法で植生調査を行った。

2) 生息環境と食性特徴：キンシコウは樹上性だといわれているが、移動するとき、特にオスとメスはしだいに低くなり地上を歩くのがむしろ通常である。亜成獣、未成熟獣、アカンボは全く自在で樹上でも地上でもそのときの都合で利用する。食物は樹皮と冬芽だが、よく食べる種類がある。水曲柳がところどころにあり、それをよく利用し、彼らの動きはそれにこだわっている。

3) 保護区と森林施業：保護区に接して沢の上流域でかなりの伐採が入っていることにはおどろいた。1999 年の長江の大洪水で全国的に森林伐採が禁止されたので、現在は伐採が止まっている。

4) 冬・春の日周期の特徴：4 月には西梁群を観察した。2,200m の標高では暖かくなり、冬芽がふくらみ、若葉が伸び出した。冬期と同様採食は特定の樹種に集中していたが、そのうち *Populus davidiana* と *Tilia chinensis* は確認できた。群れが採食していると、全部の個体がいくつかに固まり、休憩・居眠りを始め、1-2 時間続く。あと 30 分-1 時間採食すると又 1-2 時間休息・居眠りをする。冬にサルは長時間樹皮、冬芽、地衣類を食べるが、休息・居眠り時間が短い。春の方が効率的に短時間に十分な栄養をとることが出来るので採食時間が短く、冬は栄養に乏しい食物をとるので十分な栄養をとるためには長時間の採食が必要になるといえるのであろう。

5) 高出生率の可能性：春に目立つのはアカンボである。出産期なので、アカンボを抱く母親が多かった。もう一つ注目されたのは連年出産のメスがいたことである。出産期になっても満 1 才のコドモを抱いているメスは今年アカンボを産まないのだが、アカンボを抱いているメスのそばに 1 才のコドモがへばりついている。これが個体数変動にどのように影響するのか興味深いことである。

6) サルの人付け：4 月になって群れの行動に目立つ変化はオス達が見に 15-20m まで接近することだった。特に、成獣オス、未成熟オスがこちらの様子をうかがいながら座り込んだり、珍しくオス間で毛づくろいをしたり、菜食したりする。

分子生態学の面では、分析用の糞は 20 サンプル以上、繁殖場で小便 6 個体分収集して、分析中である。